

文優位性効果の記憶高進 (2)

— イメージ化の効果 —

○川崎恵里子¹・井関龍太²³・持田幸恵¹(非会員)
 (¹川村学園女子大学文学部・²日本学術振興会・³京都大学教育学研究科)
 キーワード: 文記憶, 記憶高進, チャンク

背景

○文として記憶すると、**無関連な単語群**として記憶するよりも、成績が優れているのはなぜか

・スキーマ的知識の利用を極力排除した状況でも、**文優位性効果**は見られる (e.g., Allen & Baddeley, 2009; Baddeley et al., 2009)
 →スキーマ的知識の利用によるのではない

・**チャンク形成**の仕方とその結果が違う
 井関他 (2010, 日心発表) : 文材料と単語材料とでは、**想起時のチャンクのサイズ**が異なることを示唆

→結果の**別の解釈** : 一般に、イメージ化しやすい材料の方が記憶高進は大きくなる (レビューとして、林・太田, 2002)

→井関他の結果は、文の方が単語よりもイメージを形成しやすかったことによる?

○本研究の目的 : 学習材料を符号化するとき、**イメージ化**を行うことを教示
 ・単語でもイメージが作られるようにする

方法

○**実験参加者** : 井関他 (2010, 日心発表) に参加したのとは別の女子大学の学生44名。

○**要因計画** : 2 (**学習材料** : 文・単語) × 3 (**テスト回数** : 1回目・2回目・3回目) の混合要因計画。学習材料が被験者間要因。

○**材料** : 井関他と同じ材料を用いた。
 【**文リスト**】 [柔らかい] [手袋の] [野球選手が] [すがすがしい] [夜に] [宝石を] [探した]
 【**単語リスト**】 [手袋] [夜] [すがすがしい] [探した] [柔らかい] [宝石] [野球選手]

○**手続き** : 基本的な手続きは、井関他と同じ。違いは、材料を符号化する際に**イメージ化**を行うように、実験参加者に以下の教示を与えたこと。

「文 (単語) の意味を考えて、形や姿を**はっきりした映像**として思い浮かべながらおぼえてください。」
 ・単語刺激の場合、より記憶高進を促す手続き (Erdelyi et al., 1976)

結果と考察

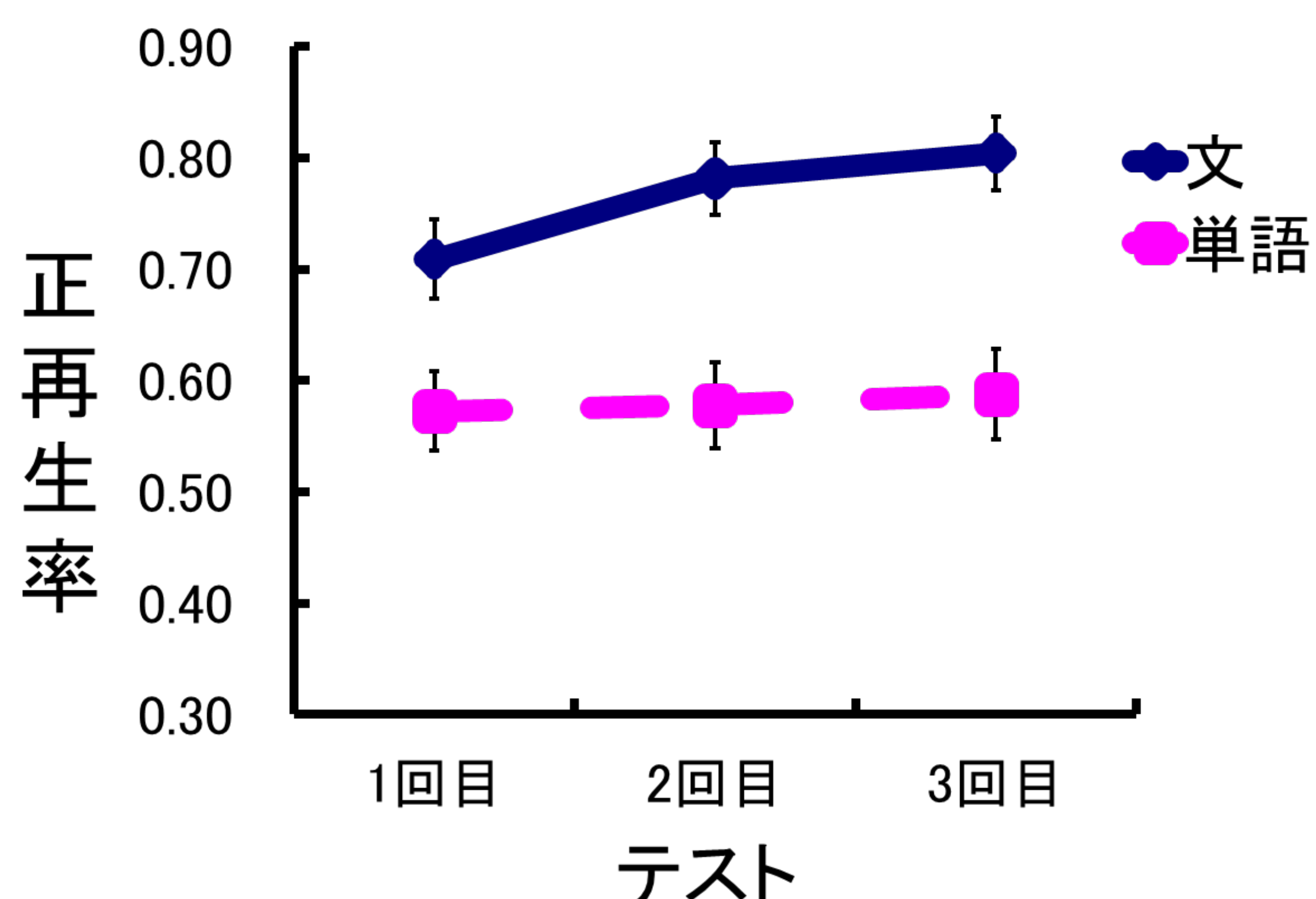


Figure 1 テスト回数ごとの正再生率 (バーはSE)

○2 (学習材料) × 3 (テスト回数) の分散分析
 ・学習材料の主効果 → 文優位性効果
 ・テスト回数的主効果 → 記憶高進
 ・**学習材料×テスト回数**の交互作用:
 a) 文 : テスト回数の効果が有意
 b) 単語 : テスト回数の効果が有意でない
 →文でのみ有意な記憶高進 (井関他と一致)

Table 1 ゲインとロスの平均個数 (カッコ内はSD)

	学習材料	1-2回目	2-3回目
ゲイン	文	4.32 (3.00)	2.09 (2.91)
	単語	2.36 (1.97)	1.50 (1.50)
ロス	文	1.32 (2.71)	1.05 (2.52)
	単語	2.14 (1.70)	1.05 (0.84)

ゲイン=前回のテストで再生しなかった項目の再生個数
 ロス=前回のテストで再生した項目を再生しなかった個数

○2 (学習材料) × 2 (テスト回数) の分散分析

【**ゲイン**】 : 交互作用なし
 ※井関他とのデータと組み合わせた分析:
 ・学習材料×テスト回数の交互作用が有意
 ・実験要因 (イメージ教示の有無) との交互作用なし
 →イメージ教示の影響は**小さい**
 【**ロス**】 : 交互作用なし

・積極的にイメージを作った場合でも、文と単語の差は残る
 ・文形式が構成要素間の関連づけを促す?